

江上剛著「戦いに終わりなし - 最新アジアビジネス熱風録 - 」

文春文庫、文藝春秋社 2010年4月10日刊を読む

1. 世界一の高学力

(1) リー・クアンユーが「人材が我が国の最も貴重な資産であることはあまりに明白である」(『リー・クアンユー回顧録』日本経済新聞社刊)と自伝で述べているように、シンガポールは非常に教育熱心な国として有名だ。同国の教科書は質の高さに定評があり、英語圏の国に輸出されているほどだ。

(2) シンガポールの教育制度を研究した東洋大学教授の斎藤里美によると、「シンガポールは世界一の高学力」だという。

(3) 大きな特徴は、早くから子どもたちを学力別にコース分けする「複線型教育システム」だ。シンガポールでは、生徒たちは日本でいえば小学校、中学校、高校にあたる学校の卒業認定試験でクラス分けされる。上位 10 %程度は国家奨学金を得て、日本でいえば東大にあたるシンガポール国立大や、ハーバード大などの海外の有名大学に進学していく。彼らは卒業後に官僚となり、国家の重要なポストを占める。

いってみればエリートの早期選別システムで、平等主義の日本とは対極にある教育システムだ。

(4) 私は 86 年の歴史を誇るホンウェン初等学校を訪問した。生徒数は 1500 人で、午前、午後と分かれて授業を受ける。ごく平均的なレベルの学校だ。

(5) 集まってくれた 5 年生の生徒たちに話を聞いた。いずれも 11 歳である。まず彼らに将来の夢を訊こうと、私や編集部の I 君がたどたどしい英語で質問すると、「香港の映画スター」や科学者、弁護士、フライトアテンダントといった答えが、きれいな英語で返ってきた。相当、打ちのめされた気分になるが、英語の実力差はいかんともしがたい。

(6) いま日本では小学校での英語教育が議論されているが、シンガポールでは英語は必須科目で一年生から教えられている。5 年生の彼らは週に 13 コマ 6 時間半も英語を勉強しているうえに、数学や社会も英語で授業が行われる。上手くなるわけだ。

(7) 副校長のタン・エンピン女史が初等教育のコース選別について説明してくれた。いまは制度改革の最中だという。

(8)従来は4年生修了時に優秀な児童とそれ以外を、完全にコース分けしていた。しかし落ちこぼれる児童が多かったようで、2008年からはコースそのものを分けるのではなく、教科ごとの習熟度別クラス編成システムに変わるといふ。たとえば英語と理科の試験に合格して、数学が不合格だった場合、数学はベーシッククラスで、他の科目はスタンダードクラスを受講する。

(9)それでも日本の感覚では選別が早い気がする。

「理解の早い児童と遅い児童を一緒にすると、教えるのが難しい。クラス分けをする方が、生徒も先生も快適なのです。」

タク女史はよどみなく答えた。

(10)6年制の初等学校が終わると児童は修了試験を受けて、4年制の中等学校に進む。15歳で中等教育が修了すると、またもや選抜試験が課される。この成績が悪ければ大学進学課程には進めず、専門学校か職業訓練校に行くことになる。ただ制度的には敗者復活も可能で、専門学校から大学へ進学することはできる。また中等教育からそのまま就職する者もいる。

(11)シンガポール政府は、専門的な教育を受けられない層の雇用を確保するため、労働集約型の産業も、ある程度は国内に必要だと考えているようだ。たとえ大学へ進学できなくても、相応の職場が確保されていれば不満は出ないだろうというのが、シンガポールの考え方なのである。

2. 英語はグローバル時代の武器

(1)私が次に訪れたのは、1879年に創立されたシンガポール最高の名門女子校であるラッフルズ女子学校だ。この学校では中等教育と大学進学の準備教育を合わせた、6年一貫教育を行っている。

(2)シェルリー・タン女史(副校長)が、「ここには初等学校卒業試験のトップ3%から5%の生徒が入学します」と、自慢げに学校を紹介した。毎年、海外からトレーナーを招聘し、教員のレベルアップにも余念がないという。

(3)ここでも生徒たちに将来の夢を聞いてみると、医者や政治家、科学者、教師、変わったところでは映像アーティストといった答えが返ってきた。

(4)ここまでは日本の優秀な中学生でも言いそうなことだ。日本とちがうのは進学先の希望だ。シンガポールの大学に行きたいという生徒もいたが、「ハーバード大かケンブリッジ大に行きたい」など、英米への進学を希望する答えが多かった。英語に不自由しない彼女たちにとっては現実的な目標なのだろう。

(5) またこの学校の特徴はリーダーシップ養成に力を入れていることだ。シンガポールでは、エリート校の生徒も勉強だけではなく、スポーツ、演劇、奉仕活動といった活動に他校の生徒と一緒に参加することが義務付けられている。そうした活動を通じて社会性やリーダーシップを培っているのだ。

(6) リー・シェンロン首相は、望ましいシンガポール人像として次のように語った。

「第一に、自己防衛ができ、自給自足できること。そのためには現代経済に適した技術を身につけなければならない。第二に継続して学習していく能力を備えること。学校で学んだことだけで卒業後の人生を働いていくことはできない。知識をアップデートしなければならないし、アップデートする知恵を備えていなければならない」

(7) シンガポール人には中国系が多く、家庭では中国語で話している。それに学校では英語を勉強しているから、多くの人バイリンガルである。これは就職に有利だ。グローバル化する社会で生き残るために子どもたちには何が必要なのか。日本も考える時期にきている。

P.94 ~ 98

[コメント]

日本人がこれから競争しなければならない人々はどのような教育を受けているか。シンガポールの様子は参考になる。熱心なのはシンガポールだけではないようだ。

- 2010年6月5日 林明夫記 -